

二〇二四年五月刊行

万里の長城、北京故宮など、  
七つもの世界遺産を有する古都、北京。  
悠久の歴史が織り成す建築美の精華を  
圧巻のビジュアルと丹念な解説でたどる

〔原著〕 王南  
〔監訳〕 李暉  
〔翻訳〕 岩谷季久子

# 北京 古建築

全二巻  
オールカラー 総計478頁  
A4判上製・カバー装

発行 科学出版社東京 発売 国書刊行会

## 本書をおすすめします

- ❖ 建築史・建築学の研究者、建築系学部図書館
- ❖ 中国史・宗教史の研究者、文学部図書館
- ❖ 県立図書館、市町村立図書館、博物館、美術館
- ❖ 建築家、建築会社
- ❖ 旅行会社、旅行の愛好家



## 『北京古建築』（上巻・下巻）

全二巻 オールカラー  
 総計478頁（上巻・下巻＝各239頁）  
 A4判上製・カバー装  
 ISBN：978-4-336-07642-7（上巻）  
 978-4-336-07643-4（下巻）  
 各巻定価：本体15,000円＋税  
 発行：科学出版社東京 発売：国書刊行会

国書刊行会 〒174-0056 東京都板橋区志村1-13-15 TEL:03-5970-7421 FAX:03-5970-7427  
<https://www.kokusho.co.jp> e-mail: info@kokusho.co.jp

取扱店

## 本書の特徴

- ❖ 圧倒的なビジュアル  
 総計800点余にも及ぶ外観・内観写真、立面図・平面図等の建築図面に加え、古地図・古写真、壁画や仏塔、彫像の写真なども多数収録。著名な建築を多角的な視点から味わうことができる。
- ❖ 日本の読者に向けた編集  
 北京の建築を網羅的に取り扱った王南著『北京古建築』（中国建築工業出版社、2015年）のうち、日本の読者にとりわけ興味深い内容を新編集。建築の専門家以外にも分かりやすい翻訳で、北京古建築の魅力を徹底解説。各章冒頭には、その章内で取りあげられる建築・庭園等の所在を示す地図、巻末には、「主な北京古建築」「参考文献」を付す。
- ❖ 七つの世界遺産を有する古都の歴史を伝える  
 建築にとどまらず、北京を古都として位置付ける歴史的な背景についても解説。金代、元代、明代、清代などの各時代における建築の変遷を丁寧に跡付ける。



大覚寺の無量寿仏殿の海島観音塑像（下巻 第六章）

など

## 目次

（上巻）	まえがき	第一章 序論	第二章 紫禁城	第三章 壇廟・儒学	第四章 官庭庭園	第五章 合院民居	（下巻）
第1節	山河の形勝	第1節	城壁と城門	第1節	太廟・社稷壇	第1節	合院民居
第2節	歴史・沿革	第2節	後殺	第2節	天壇	第2節	代表的な邸宅
第3節	建築の特徴	第3節	先農壇・先蚕壇	第3節	地壇・日壇・月壇	第3節	第六章 仏教寺院
第4節	後殺	第4節	歴代帝王廟	第4節	先農壇	第4節	第1節 仏教寺院概説
第5節	堂子	第5節	孔廟・国子監	第5節	先農壇	第5節	第2節 代表的な仏教寺院
第6節	順天府学	第6節	西苑三海	第6節	先農壇	第6節	第七章 仏塔
第7節	順天府学	第7節	景山御苑	第7節	先農壇	第7節	第1節 仏塔概要
第8節	順天府学	第8節	三山五園	第8節	先農壇	第8節	第2節 代表的な仏塔
							第八章 道観とモスク
							第1節 道観
							第2節 モスク
							主な北京古建築
							参考文献
							あとがき
							監訳者あとがき

## 原著者略歴

王南（おうなん）  
 一九七八年生まれ。二〇〇一年清華大学建築学院にて「建築学学士」、二〇〇八年同学院にて「工学博士」を取得。著書に『古都北京』『北京古建築地図（上・中・下）』など多数。

## 監訳者略歴

李暉（りほい）  
 中国山西省生まれ。二〇一五年東京大学大学院工学系研究科建築学専攻博士課程修了。博士（工学）。奈良文化財研究所アソシエイトフェローを経て、二〇二三年より奈良女子大学大和・紀伊半島学研究所古代学・聖地学研究室センター協力研究員。



天壇祈年殿西側全景（上巻 第三章）

## 申込書

ご記入後、お近くの書店へお持ち下さい。

『北京古建築』（上巻）を \_\_\_\_\_ 冊 注文します

『北京古建築』（下巻）を \_\_\_\_\_ 冊 注文します

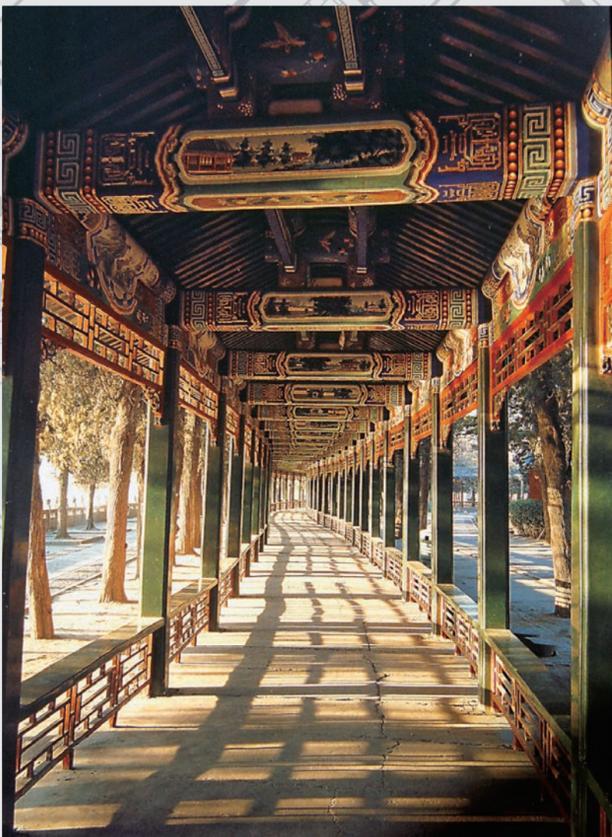
お名前 \_\_\_\_\_

ご住所 \_\_\_\_\_

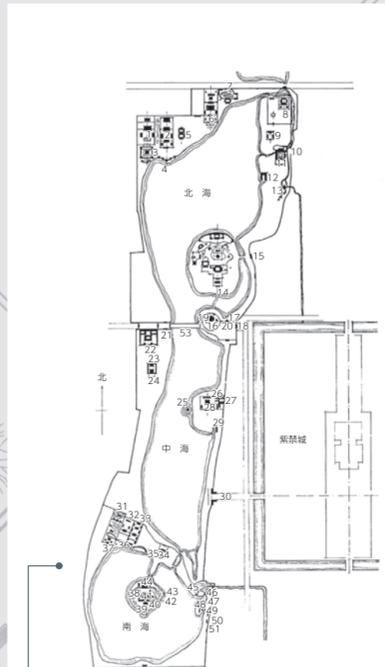
お電話 \_\_\_\_\_



《京師生春詩意図》(上巻 第一章)



頤和園長廊 (上巻 第四章)



- |         |          |          |           |
|---------|----------|----------|-----------|
| 1. 万仏楼  | 15. 勝山門  | 29. 船塢   | 43. 切魚亭   |
| 2. 闡福寺  | 16. 団城   | 30. 西苑門  | 44. 翔龍閣   |
| 3. 極樂世界 | 17. 桑園門  | 31. 香積齋  | 45. 漱清院   |
| 4. 五龍亭  | 18. 乾明門  | 32. 崇雅殿  | 46. 日知閣   |
| 5. 澄鏡堂  | 19. 承光左門 | 33. 豐沢園  | 47. 雲輪樓   |
| 6. 西天梵境 | 20. 承光右門 | 34. 勤政殿  | 48. 清音閣   |
| 7. 勝瀛亭  | 21. 福壽門  | 35. 延秀亭  | 49. 船塢    |
| 8. 先蚕堂  | 22. 朝陽宮  | 36. 菊風閣  | 50. 同慶軒   |
| 9. 隆福殿  | 23. 武成殿  | 37. 大園鏡亭 | 51. 靈古堂   |
| 10. 古楹亭 | 24. 紫雲閣  | 38. 長春園  | 52. 宝月樓   |
| 11. 画舫齋 | 25. 水雲閣  | 39. 迎暉亭  | 53. 金鯉玉蟬橋 |
| 12. 船塢  | 26. 千聖閣  | 40. 瀟台   |           |
| 13. 濼源閣 | 27. 内監学堂 | 41. 添元殿  |           |
| 14. 瓊華島 | 28. 万善殿  | 42. 補明齋  |           |

図 4-1-1 清・乾隆時代の三海総平面図 (出所:『中国古典園林史』)

した際、円城と東岸の間の水域が埋められ、円城は水中の島から東岸に突き出る半島になり、当初、土で築かれていた高台は磚で包まれた城台に改築され、「団

4 (伊) マルコ・ポーロ『東方見聞録』馬可波羅訳(中国語題名『馬可波羅行紀』、上海書店出版社、2001年) 208頁。  
5 (清) 于敏中ほか『日下旧聞考』(北京古籍出版社、1983年) 643-644頁。

城」と改名された(図 4-1-4)。  
団城の中央には清代に再建された承光殿がある。平面は「十」字形で、間口・奥行きともに3間の梁階付き入母屋造である。四方にはそれぞれ1間の抱厦が出ており、入母屋造の大棟を滑らかに納めた「歇山卷棚頂」になっている。主体と抱厦の屋根は、共に緑の緑取りをした黄色の琉璃瓦を使用し、台基の欄板は黄色と緑の2色の琉璃磚で造られており、全体の造形は優雅で特徴的である(図 4-1-5)。

団城と北海西岸の間には、かつて大きな石橋が架けられ、橋の東西両端には精緻で美しい牌樓が建てられていた。牌樓の上にはそれぞれ「玉鯉」「金鯉」と記されており、この橋は「金鯉玉鯉橋」と呼ばれていた。団城と金鯉玉鯉橋は、共に西苑の一大美景を構成し(図 4-1-6)、『日下旧聞考』では『戴司成集』を引用して次のように描写している。

去深池には長い橋がかかっており、その両端にそれぞれ牌樓が立っている。西側の牌樓は「金鯉」、東側の牌樓は「玉鯉」と呼ばれる。晴天の日、陽射しが水面に反射し、澄み切った美しい景色を楽しむことができる。

残念なことに、「金鯉玉鯉橋」と牌樓は1950年代に取り壊され、現在の北海大橋に改築され、昔の美しい景観は失われてしまった。しかし、幸い団城と承光殿は現在も良好な状態で保存されており、中国の伝統的な宮廷庭園の中で「台榭〔高台に建つ建築〕」の貴重な実例となっている。中国は春秋戦国時代からすでに「高い台榭と美しい宮殿」という伝統があり、残念ながら、黄金台や銅雀台のような有名な初期の台榭は失われてしまったが、北海の団城は台榭建築の貴重な遺存である。城台には、「白袍將軍」「連陰侯」「探海侯」など優雅な古松があり、団城の魅力を一層高めている(図 4-1-7)。

また、元代に瓊華島の広寒殿に置かれた巨大な玉製の甕「浣山大玉海」(モンゴル人の酒器)は、明清時代に一時西安門外の真武廟(玉体庵)に流れ着き、「塩漬野菜の甕」にされていたことがある。最終的に乾隆帝によって承光殿の前の亭に置かれ、歴史的な味わいを大いに団城に添えることとなった(図 4-1-8)。

(2) 瓊華島(万歳山、白塔山)  
金の時代、大寧宮の中央の島は「瓊華島」と呼ばれ、大量の玲瓏石が積み重ねられていた。これらは当時の



図 4-1-2 現在の三海鳥瞰 (出所:『長安街:過去・現在・未来』)



図 4-1-3 北海全景



図 4-1-4 団城

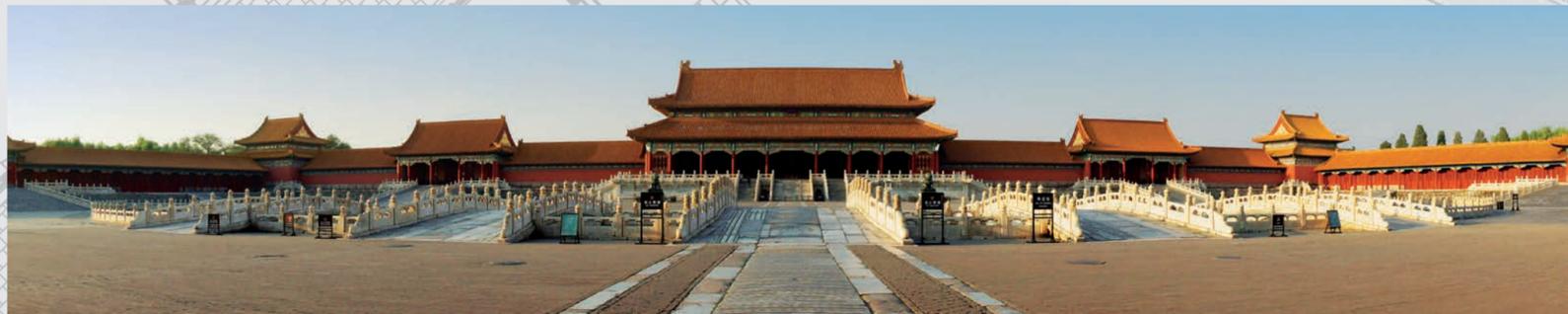
組見本 (上巻)

65% 縮小

平面図・立面図や絵図など、建築をより深く、歴史的にとらえるための史資料もふんだんに掲載

建築の専門家以外にも分かりやすい丁寧な解説

壮麗な建築の魅力を余すところなく紹介する多彩なカラー写真



紫禁城太和門広場全景 (上巻 第二章)

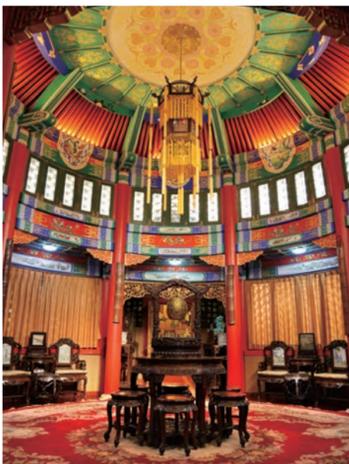
### 北京の古建築をたどり中国文化を知る最良の書

李暉 (奈良女子大学 大和・紀伊半島学研究所古代学・聖地学研究中心 センター 協力研究員)

万里の長城・北京故宮・周口店の北京原人遺跡・頤和園・天壇・十三陵・大運河という、七つの世界文化遺産を有し、「都市計画における比類なき傑作」(梁思成)とも称される北京。日本の建築史家・伊東忠太は、北京の紫禁城と西苑を最初に測量した人物で、「中国建築史」などの著作には、北京古建築に関する多くの考察がある。また、常盤大定と関野貞による『中国文化史跡』は、多数の北京古建築を写真で記録するなど、近代以降の日本でも、中国とりわけ北京の建築に対する興味は尽きなかった。

本書は、その北京の建築を網羅的に取り扱った王南著『北京古建築』(中国建築工業出版社、二〇一五年)の日本語版である。原著は全一六章からなるが、本書はこのうち序論、紫禁城、壇廟・儒学、宮廷庭園、合院民居、仏教寺院、仏塔、道観とモスクという、とりわけ日本の読者が興味をもつと思われる八章を抜粋して再編集し、日本語・翻訳したものである。原著者の王南氏は、北京古建築に関する多くの業績を有し、中国の清華大学建築学院において教鞭をとられている。原著が出版に至るまで、十数年にわたる北京古建築の現地調査の蓄積があったからこそ、北京古建築の全貌を読者に魅せることができたと思われる。

北京は、現在も中国の首都であるが、都としての歴史は、遼代(九一六〜一二二五)の副都(燕京)、金代(一一二五〜一二三四)の中都、元代(一二七二〜一三六八)の大都まで遡る。明代(一三六八〜一六四四)には永楽帝・朱棣が北京への遷都を機に中国江蘇省の大工集団を起用し、大規模な造営をおこなった。続く清代(一六四四〜一九二二)も、北京を都として引き継ぎ、絶え間ない造営により現代に続く北京を造り上げたのである。紫禁城をはじめ、数々の皇族を象徴する建築が残されており、上記の章立てが古都北京の代表的な建築類型を捉えている。写真や図面を多数収録し、分かりやすく解説した本書によって、少しでも日本の読者が北京の古建築、またその背景にある中国文化を知っていただくことにつながれば、監訳者として嬉しい限りである。



礼士胡同129号四合院の円亭内景 (下巻 第五章)



銀山塔林にある金代墓塔5基と明代墓塔2基の全景 (下巻 第七章)